2024年12月29日 第二礼拝

説教題「終わりまで、あなたの道を」ダニエル12章13節、ヘブライ12章1～3節

主任牧師　加藤誠

「終わりまでお前の道を行き、憩いに入りなさい。時の終わりにあたり、お前に定められた運命に従って、お前は立ち上がるであろう。」（ダニエル 12：13）

2024年最後の主の日。それぞれに一年を振り返っておられることと思います。今年は能登半島の震災と羽田空港の航空機事故で始まりました。個人的なことですが、昨年11月に91歳の父が倒れ、アドベントから年末にかけて川越の病院に通いづめでした。ただ31日の時点で父の容態は安定していると言われたので、元旦礼拝の後、夕方の飛行機で妻の実家のある旭川に帰りました。ところがその夜中に父の容態が急変し病院から電話があり、まもなく父は息を引き取りまして、翌朝一番の飛行機で旭川から羽田に戻りました。その数時間後に事故で羽田空港は閉鎖となって飛行機ダイヤは大混乱。もし父の容体の急変が半日遅れていたら、わたしは旭川から東京に戻ることができなかったわけで、その絶妙なタイミングに神に深く感謝したのでした。

けれどもそれは私たち家族のケースであって、わたしの知らないところで数時間のズレが深い悲しみにつながった方々がおられたかもしれないと想うと、軽々に「それは恵みでした！」と無条件で喜ぶことはできないのです。そのことで思い起こすのは今から30年前の阪神淡路大震災の時のことです。私たちの家族五人はギリギリのところで誰もケガすることなく無事でした。教会の建物も被害を受けましたが補修可能な状態でした。お見舞いに来てくださった他宗教の方が「皆さんの信心のおかげですね」と言われましたので、わたしは「信心のおかげとは違います」と即答しました。私たちの信心の深さで被害の善し悪しが決まる？。そんなことはありません。すぐ近くのカトリック教会は全壊でした。バプテスト教会の信心は篤くて、カトリック教会の信心は薄かったからだ…ということはありえないことです。

「人間の信心の篤さで神の恵みが決まる」。これは因果応報信仰ですが、主イエスは当時の因果応報信仰をバッサリと両断されました。「律法に忠実は人は恵みを受け、忠実でない人は災いを受ける」という因果応報信仰のゆえに、たとえば重い病気や障がいを持った人を信仰薄き人々と見なすような考え／偏見を主イエスは打ち砕かれました。そしてご自身は十字架の不条理の苦しみを受け尽くされたのです。多くの人が「神の子がそんな惨めな死に方をするはずがない」と嘲って唾を吐きかけました。けれども、ほんとうの神の子だからこそ不条理の死を死なれ、私たち人間の救いようのない

どす黒い罪を受け尽くしてくださったのです。

私たちが生きている現実は「とても神がいるとは思えない不条理」があふれる世界ですが、しかし神はおられ、私たちを復活の命の希望に導いてくださる。その喜びの知らせを確かなものとして手渡すために、神の御子は飼い葉桶に生まれ、十字架の道を最後まで歩み通してくださったのです。

今朝ご一緒に開いたダニエル書は、旧約聖書の時代に不条理の苦難を強いられている人々を励ますために書かれた書物です。主人公は捕囚でバビロンに連れてこられたユダヤの青年ダニエル。名前も食事も教育も、すべてバビロニア式を押し付けられる中で信仰だけは捨てまいと戦い生きた人です。ダニエル書の前半はバビロン時代のダニエル物語ですが、後半は時代的には約 350 年後、ユダヤの人びとが約束の地に帰還した後に、こんどはギリシャ王国の侵略を受けて再び不条理な苦難を強いられた時代の人々に向けてダニエルの励ましが語られる内容になっています。

今朝は 12 章の最後の言葉、ダニエル書の結論ともいうべき言葉を読みました。ダニエルはその直前の天使の言葉があまりに厳しく重かったので地に倒れますが、天使に励まされ立ち上がりながら尋ねます。「この災いはいつまで続き、最後はどうなるのですか？」と。天使が答えます。「それは終わりの時まで秘められ、封じられている。それを待ち望む者は幸いだ。終わりまでお前の道を行き、憩いに入りなさい。時の終わりにあたり、お前に定められている運命に従って、お前は立ち上がるであろう」。

ここには、今の時代を生きる私たちへの励ましが語られています。私たちが生きている世界にも「この不条理の苦難はいつまで続き、最終的にどうなるのですか」と問いたくなる現実があふれていますが、それに対してダニエル書は「その時は神の御手の中にあって人間が知ることはできない。しかし必ず神はその苦難を終わらせ、不条理を強いられている人に憩いを用意されている。神の約束にしっかりと目を注いで最後まで、あなたの道を行きなさい」と語っているのです。

聖書の信仰は「約束の信仰」です。今はまだこの目で見て手で触るようなかたちで神の恵みを握ることはできないとしても、神の約束は必ず実現する。今は暗い闇に閉ざされていても、神が不条理を正して神の国の幸いがはっきり分かる時が必ず来る。その神の約束の杖のように握りしめて歩む信仰です。旧約のダニエル書の段階では「言葉による約束」だったものが、新約聖書のイエス・キリストにおいて「十字架という目に見える約束」となりました。そういう意味はクリスチャンは、十字架を杖のように握りしめて歩む恵みをいただいたのです。「終わりまで、あなたの道を行き、憩いに入りなさい」。「あなたの道」＝「わたしの道」とはどういう道でしょうか。それは決して

「わたしだけの孤独の道」でも、「どこに着くのかわからない目的地不明の道」でもありません。「共に歩んでくださる方の十字架を握りしめて、神に約束に向かって歩む道」だからです。私なりの仕方で主イエスに従う。主イエスが一緒に歩んでくださる恵みと喜びを、私なりの仕方であらわしてく道。新しい年も、神の約束に向かう恵みを教会の友と分かち合いながらご一緒していきましょう。